



シャクナゲ

撮 影 日：令和 3 年 6 月 1 8 日

撮影場所：秋田市 民家敷地

目次

生産現場情報：白神ねぎの除草作業の省力化を目指して～除草機を活用した取り組み～	・ P 1 ～ 2
営農支援情報：【野菜】夏から秋にかけての管理作業ポイント	・ ・ ・ ・ ・ P 3
ご 紹 介：秋田米新品種「サキホコレ」のパッケージデザイン発表	・ ・ ・ ・ ・ P 4
スマート農業普及促進の取り組み	・ ・ ・ ・ ・ P 5
「田んぼの生きもの調査」を実施しました	・ ・ ・ ・ ・ P 6
ＪＡ秋田ふるさとで西瓜（スイカ）出発式開催	・ ・ ・ ・ ・ P 7

白神ねぎの除草作業の省力化を目指して ～除草機を活用した取り組み～

1. 経緯

ＪＡあきた白神と全農秋田県本部は、「農家手取り最大化」に向けた取り組みを実践しています。その取り組みの一つとして、白神ねぎの更なる反収・品質向上に向けた圃場管理の効率化を図るため、除草作業の省力化を目的に新しい除草機の開発を行いました。

2. 開発に向けて（検討・試験・課題）

除草機の開発にあたっては、昨年度よりＪＡ・全農・メーカー（ヤンマー・キュウホー）にて検討会を実施するなど意見交換を行い、田植機の植付部にキュウホー除草機を加工取付けして走行させることにより除草可能となる自走式除草機を開発しました。

今年６月に実施した走行試験では、１０ａ当たり換算の除草時間が約６０分（株間の除草等の補完作業を含む）で行うことができると推測され、従来の手作業では約２日かかるところを大きく省力化できると期待できます。

しかしながら、除草機の爪部分でねぎを傷つけてしまう恐れがあるため、株間ぎりぎりの除草が難しかったり、生育が進んで大きくなってくると除草機にねぎが当たり折れてしまうため、使用できる期間が限定的であったりと課題はあるものの、試験にご協力いただいた生産者様からは概ね高い評価をいただくことができました。



検討会の様子



試験の様子

3. 今後の展望

今後は、本格的にねぎの出荷が始まり、出荷調整に人手をかけなければならず、圃場管理の人員が少なくなる場面が想定されます。そういった場合、この除草機を使用することにより少人数で圃場の除草作業を行うことができ、出荷調整と栽培管理の作業が重なるタイミングで効果を発揮すると期待されます。

また、この除草機を発案したJAあきた白神の佐藤和芳営農部長は「園芸メガ団地設立当初から様々な除草方法を検討し、挑戦と失敗を重ねてきた中でこの除草機はなかなかの効果が見られる。今後は、雑草の大小で対応できる除草機を製作し、効率化を図っていきたい。また、手作業での除草と除草機を使用した場合のコストを算出し、どのぐらいの面積から除草機を使用すればメリットが出るかを検証していきたい」と話してくれました。



除草機での作業中



除草された雑草



除草試験結果

(左側：除草機にて除草済み) (右側：未除草)



【野菜】夏から秋にかけての管理作業ポイント

夏本番を迎え、気温の高い日が続くので高温対策を徹底するとともに、施設・露地栽培とも、こまめなかん水管理や通路散水等を行い、草勢維持に努めてください。

【雨よけホウレンソウ】

曇雨天後の強い日差しにより葉がしおれたり、葉焼けを生じる場合があります。特に生育初期の地際部は高温障害を受けやすいので、遮光資材等を活用し地温の上昇を抑えます。また、土壌が乾燥すると、ホウレンソウの生育が停滞するため、播種前のかん水はムラなく十分に行います。

発芽まで3～5日を要しますが、この間に種子のある深さまで過乾、過湿になると発芽不良になるので気温や土壌の乾燥状態に合わせた土壌水分管理が重要です。発芽直後から本葉4枚頃までは、立枯病や徒長を防ぐため基本的にかん水は行いませんが、砂質土壌や乾燥傾向の場合は若干量行います。収穫7～10日前ころからは、品質低下を防ぎ、葉色の向上と葉の厚みを持たせるためにかん水は行いません。



【秋冬どりキャベツ】

秋冬どりキャベツの定植は一番暑い高温乾燥時に行われるので生育抑制・遅延を招きやすくなります。かん水施設のあるところでは、夕方か朝の温度の低い時に積極的にかん水します。特にセル成型苗の場合は定植後に乾燥している場合にかん水の効果が高まります。



第1回目の追肥は定植後15～20日頃に畝の肩に施し、第2回目は結球始め頃に畝間に施し軽く中耕・培土します。追肥量はチッソ、カリ成分で1回当たり4～5kg/10aとします。

【秋冬ネギ】

10月から収穫が始まる秋冬ネギは、出荷規格の軟白長が30cmになるので8月以降の土寄せが重要作業となります。畝を平らにする削り込みが終了後、20日前後の間隔で土寄せを行い、最後の土寄せは収穫予定の25～35日前に行います。収穫期間が長くなると葉鞘部の伸長が進み、葉鞘部が緑白部（ボケ）になり品質が低下するので、最終土寄せは大面積を一斉に行わず、日毎の収穫量にあわせて行います。最後の土寄せ以外は、葉身部と葉鞘部の分岐点を超えないように分岐点から10cm程下まで行い、最後は葉身と葉鞘部の分岐点まで行います。



秋田米新品種「サキホコレ」のパッケージデザイン発表！

秋田県は7月8日、令和4年秋に本格デビューする秋田米新品種「サキホコレ」のパッケージデザインを発表しました。このデザインは、名称「サキホコレ」の文字を袋いっぱいに描き、「サキホコレ」に込められた産地の思いや誇り、そして秋田米の最上位品種の堂々とした風格を表現しています。



東京で開催された発表会では、横手市出身のタレント壇蜜さんとパッケージをデザインした原研哉さんが、除幕式を行い、ステージ上には「サキホコレ」の特大米袋がお披露目されました。壇蜜さんは「パッと見て誰でも読める安心感がある。人は迷ったらシンプルなものを選ぶ。サキホコレは咲き誇ると思う」と話したほか、秋田県庁からリモートで参加した佐竹敬久知事は「米の白さが表現されていて清楚な感じ。品格があり、目に焼き付く」と話しました。

また、10日に秋田市で行われたパッケージデザイン周知イベントでは、秋田県が「サキホコレ」PRのために制作した「サキホコレ音頭」とともに、踊りも初披露されました。



スマート農業普及促進の取り組み

ＪＡ秋田ふるさとりんご部会が７月８日「自動草刈り機の実演会」を開催しました。ＪＡ秋田ふさと管内の果樹園で行われ、生産者の高齢化に加え、摘果や収穫作業の必要な労働力の確保が難しい中、負担の大きい草刈り作業を自動化することで果樹農家の労働力の軽減を図る事が目的です。実演機は、ロボット草刈り機のロボモア（和同産業株式会社）とオートモア（ハスクバーナ・ゼノア株式会社）、電動リモコン式スマモ（株式会社丸山製作所）の３機種。ロボット草刈り機は、あらかじめ決めた走行エリア内をランダムに２４時間自動で草を刈ることができ、傾斜地での使用も可能。



自動リモコン式の草刈り機は、無線で操作ができ、機種の高さがわずか４０センチであるため低く狭い場所での作業も可能。草刈り作業に費やされる時間や労力を省力化し、その分を別の作業へ向けることでさらなる高品質りんご生産に結びつけることができると期待されています。

ＪＡ全農あきたは、７月１６日、ＪＡ秋田なまはげおよび生産者、株式会社丸山製作所、片倉コープアグリ株式会社の協力のもと「農業用ドローンによる追肥肥料散布試験」を行いました。近年、生産現場で導入が進む農業用ドローンの使用は、除草剤や殺菌殺虫剤の農薬散布がメインとなっていますが、肥料散布ニーズも潜在的に存在しています。しかし肥料は面積当たりの散布量が多く、ドローンは積載量やバッテリーに制限があるなど肥料散布における難点もあることから、今回の試験は効率化かつ省力的な肥料散布方法の検討を目的として実施されました。散布試験は、１０２ａの圃場において、散布肥料「空散



追肥３０６」を肥料現物４０ｋｇの施肥、実演機はＤＪＩ社製「Ｔ２０」を使用、飛行速度は時速１０ｋｍ、ドローンのシャッター開度やインペラ回転数等を設定することで肥料の吐出量を調整して行いました。結果として所要時間は約２５分（飛行時間約１４分、肥料充填・バッテリー交換時間約１１分）となりました。想定していた２０分を超過したものの、肥料の散布状況はムラも少なくスムーズに実施することができました。今回の現地試験結果をもとに、生産現場でのドローン追肥技術の普及に取り組めます。

ＪＡ全農あきたは今後も生産者ニーズに応えるとともに作業の省力化へ向けたＩＣＴ技術などを活用したスマート農業の普及促進に努めます。

「田んぼの生きもの調査」を実施しました！

ＪＡ全農あきたでは、令和３年度の「田んぼの生きもの調査」を６月上旬から７月上旬にかけて、ＪＡ及びＪＡ青年部と連携して ①６月１０日 大仙市立横堀小学校、②６月１５日 美郷町立六郷小学校、③６月１６日 美郷町立仙南小学校、④６月１７日 大仙市立神岡小学校、⑤６月２２日 大仙市立高梨小学校、⑥６月２３日 北秋田市立米内沢小学校、⑦６月２８日 北秋田市立鷹巣東小学校、⑧６月２９日 秋田県立大曲支援学校、⑨７月２日 大仙市立南外小学校 の９校で児童約２７０名の参加のもと実施しました。（雨天により１校で中止）

この調査は、農業と環境の深い関わりや生物多様性の維持・保全の大切さを実感する活動として取り組んでいます。どの学校の児童たちも、最初のうちは腰が引けていましたが、いったん田んぼに入ると興味津々に生きものを探し始めます。田んぼでの一斉調査の後、植物班と陸生・水生動物班に分かれて採集します。普段は気が付かない幼虫などが見つかり、名前や生態などを知ると、児童のみならず先生方も感心していました。今回は近くの用水路でウシガエルのオタマジャクシが見つかり、その大きさに人気をひとり占めしてました。



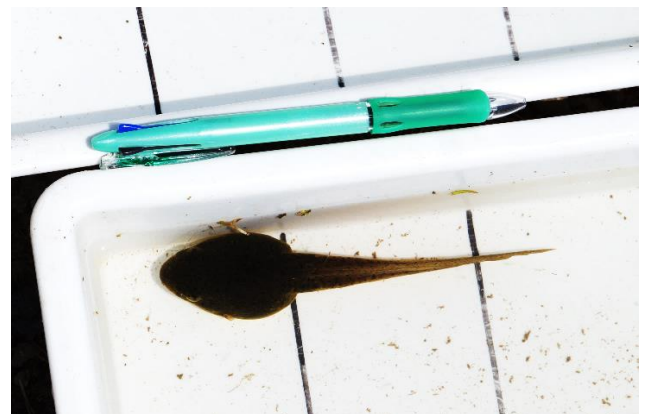
田んぼでの一斉調査



陸生・水生動物の調査



植物の調査



ウシガエルのオタマジャクシ



ＪＡ秋田ふるさとで西瓜（スイカ）出発式開催

ＪＡ秋田ふるさと産のスイカの本格出荷が始まり、７月２０日、横手市雄物川町のＪＡ秋田ふるさと雄物川集出荷所で西瓜出発式が行われました。県内のスイカ生産量の７割以上を占めるＪＡ秋田ふるさと管内では、生産者２７７戸が約１５４ｈａで、県オリジナル品種「あきた夏丸」を中心にスイカを栽培しています。式には、生産者やＪＡ秋田ふるさと、秋田県、横手市、ＪＡ全農あきたなどの関係者４０人が出席し、市場へ出発するトラックを前に、今シーズンの集出荷作業の安全と目標販売額達成を祈念し、神事とテープカットを行いました。



7月29日 佐竹敬久秋田県知事を訪問し
出荷開始を報告しました！

写真左から：ミス・フレッシュ秋田

ＪＡ秋田ふるさと柿崎大二郎専務、佐竹敬久秋田県知事

ＪＡ秋田ふるさと西瓜部会佐々木徹部会長

ＪＡ全農あきた吉田良園芸畜産部部長



Za・あぐりふおーむ

Zennoh-akita agriculture+reform

JA全農あきた営農情報誌 Za・あぐりふおーむ
第18号 令和3年8月5日発行

編集・発行 JA全農あきた営農支援部営農支援課 〒010-8558秋田市八橋南2丁目10番16号 018-864-2462